

登山家、山岳写真家が初めてリニア新幹線を考える集会、60人の会場に110人が参加

## リニア工事は南アルプスの魅力を損なう



5月20日午後7時から、東京・渋谷のモンベル5Fサロンで、登山家有志が呼びかけた「南アルプスは大丈夫？登山者の立場からリニア新幹線を考える集会」が開かれ、予想を大きく超える110人が参加しました。全国から、山岳ガイド、登山愛好家、山岳写真家、溪流釣り愛好家のほか、リニア市民グループが集まり、会場は熱気に包まれました。集会は、川名真理さん(出版社編集者)の司会で進められ、冒頭に呼びかけ人の一人で山岳ガイドの山田哲哉さんがコーディネーターとして挨拶し、「予想

を超える方々に集まっていたいただき、リニアが小さな問題ではないことが分かった。昨年10月に着工認可が行われ、既に着工しているような雰囲気だ。リニアがどういう風に大変か良く分かっていないので、そのあたりを3人のゲストから聴きたい」と述べました。

最初の講演者は登山ガイドで写真家でもある志水哲也さんで、「登山者にとって南アルプスとは」というテーマで、南アルプスの魅力について語り、続いて日本自然保護協会の辻村千尋さんが、「リニア before after、南アルプスの自然」と題して南アルプスの地質や工事による地下水や環境、生態系への影響についてリニアの問題点を指摘しました。最後に長野県の「大鹿村の100年先を育む会」の前島久美さんが、「現地で今起きていること」として、日本一美しい村と言われる大鹿村の自然環境や景観、村民生活とリニア工事について報告しました。三人の講演の後、参加者との質疑応答が行われ、南アルプスを愛する登山家や釣り人もリニア新幹線について声を上げ、リニア沿線住民とともに計画の見直しのため活動しようということで一致し、このような集会を重ねてリニア工事の影響について認識を深め行動することで合意しました。

集会は最後に、2年前に登山専門誌『岳人』に、リニアの南アルプスへの影響を問題視する記事を初めて寄稿したジャーナリストで山岳写真家の宗像さんが、「私が記事を書いてから時間が経ったが、ようやく今日のような集会にこぎつけ、こんなに多くの方々が集まってくれた。この動きを絶やすことなく広げていきたい」と、閉会の言葉を述べました。3人のゲスト・スピーカーの講演概要は下記の通りです。

### 人間は自然をいじりすぎている～ 志水哲也さん

私は19歳のときに大井川の25、6本ある沢を登ったが、30歳の時にまた大井川に行きました。井川という所を発進基地にしてテントを張ったが、ダム放流で水没して途方に暮れていたら、地元のお年寄りの女性がシイタケ小屋を提供してくれました。その時に大井川の沢を全て踏破しました。

大井川の魅力はさわら島という所にある赤い岩の溪谷など沢山ありますが、山岳ガイドになってから聖沢に行ったら、中部電力が巨大な堰堤を造っていて興ざめでした。私はこれまでヨセミテやアルプスなど世界の岩壁を登ってきたが、日本の沢には外国にない魅力があり、そうした魅力を写真で伝えていきたいと思います。これまでその思いで、屋久島や白神山地などを取材し写真集も出してきました。いまは黒部市宇奈月に住んでいますが、昔に冠松次郎という人が



いました。黒部の電源開発時代の登山家です。山や溪谷の写真を残しています。彼はまた沢登りの創始者であり、山よりも沢の魅力を伝えたいという人でした。

さて、リニアの南アルプスのトンネルですが、私は23歳の冬、24日分の食糧などを詰めた重さ34キロのリュックを担いで、南アルプスの端から端まで20日間で踏破したことがあります。北アルプスが険しさのイメージですが、南アルプスの山は重厚で、「森林の南ア」と言われ、日本の山の代表格です。リニアはそこに係る問題なので重く受け止めなければなりません。

南アルプスにトンネルを掘る、そしてその結果、水の枯渇や残土問題が起きます。黒部でもダム建設で水の枯渇や山体崩壊が起きています。最近では地震や火山噴火も頻発しています。人間は自然をいじりすぎています。山岳ガイドの仕事をしていて思うことは、登山をしていると、「人間は電気が無くても生きていける」ことを体験できるということです。リニアは新幹線の何倍もの電力を使う。そういう方向に向かうのは人間がすべきことではない。電力をなるべく減らしていくことが求められていると思うのです。

## 風景を失くすことは歴史を失くすことである～辻村千尋氏



リニア計画は2011年から具体的に動き出しました。その年の5月に事業認可が下り、環境影響調査が始まりました。その後の環境アセスメントが進められ、昨年10月、国交大臣はリニアの工事計画を承認しました。私たちにはもはや、法的にリニアを止める手立てはありません。リニア新幹線は東京・大阪間を67分で結ぶ計画ですが、まずは2027年までに東京(品川)・名古屋間を5兆5千億円で作り、その後また借入金が可能になったら、3兆6千億円かけて大阪までを建設することになっています。昭和48年に中央新幹線計画が出来たが、その時は国のお金でつく

る計画でしたが、整備新幹線としての順番は下位でした。業を煮やしたJR東海は2007年になって、建設費を全額自社負担してリニアをつくることを表明しました。ですから、整備新幹線とは言え、リニアは一民間企業の事業であり、そのため余計に中止させにくい。

リニアの予定ルートにはたくさんの活断層があります。原発の再稼働でも言われていますが、活断層の上には公共の施設は作らないということが常識になっています。なのに、リニアは多くの活断層を横切ります。JR東海はなるべく短い距離で横切ると説明していますが、それは通用しません。南アルプスは年間4ミリづつ隆起していることが分かっています。それは何百万年の隆起を平均化した数字なので、年間にメートル単位で隆起する可能性もあるわけです。

山梨のリニア実験線の延伸工事では沢や井戸の水枯れが起きています。静岡では標高2千メートルのところに残土置き場を造る。これは殺人行為です。風景を失くすことは歴史を失くすことです。リニアを止めなければなりません。

## 何もないとところが大鹿村の魅力～前島久美さん

リニア計画と大鹿村についてお話しします。大鹿村は四季の移ろいが美しい村で、何もないとところが魅力です。その何もないとところにリニアが出来ます。私たちは子どもたちに残したい大鹿村を子どもたちに残したいという理由で「大鹿村の100年先を育む会」をつくりました。子どもからお年寄りまで40名の方が参加しています。活動としては、トイレのボランティア清掃、古老の話を



聴く、自然観察、それにリニアを考える話し合いなどがあります。

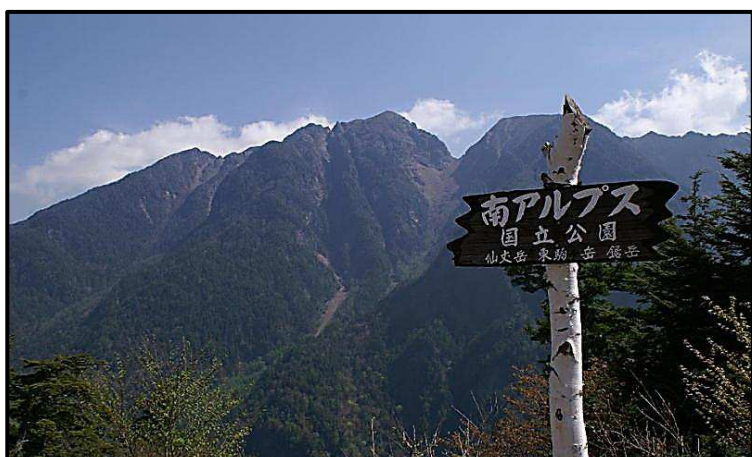
活動の一環として私は平成24年度から大鹿村周辺の植生調査を続けています。きっかけは、2011年にリニア計画が明確になって、大鹿村に変電所とトンネル坑口4か所それに小渋川の橋梁がつくられ、村全体がリニアの工事現場になってしまうことが分かったことでした。赤石岳の登山口である釜沢集落には17世帯20名が生活していますが、そこにトンネル工事現場ができます。いま、24時間の水平ボーリング調査が行われています。村で1軒しかない養魚場には変電所ができます。大鹿村の旅館はすべてその魚を宿泊客に出しています。小渋川の深い谷にはリニアの橋梁がつくられ、送電線とともに村の景観を台無しにします。

大鹿村にあるリニア対策委員会は業者寄りです。そのため、私たちは「もう一つのリニア対策委員会」を起ち上げて、リニア計画の見直しを求めています。なぜ私たちは大鹿村に住み続けたいのか、それは、いつまでも変わらない、何もない大鹿村で生活したいからです。皆さんも是非一度大鹿村にいらして下さい。

(このあと、前島さんは自らが撮影した美しい大鹿村の原風景や四季折々に見せる植物の美しい写真を紹介してくれました)。

以上

(写真・文 天野捷一)



リニア新幹線を考える登山者の会

03(3752)4717(橋本さん)

[tozannsyarinia@gmail.com](mailto:tozannsyarinia@gmail.com)